

社会を見つめ，社会と関わる力を育成する社会科授業の開発

—小・中学校における「社会的な見方・考え方」の接続・発展に着目して—

小林 怜史・川上 剛・青柳 忠臣・田仲 香里
吉永 貴臣・熊田 禎介・溜池 善裕・松村 啓子

社会を見つめ、社会と関わる力を育成する社会科授業の開発[†] —小・中学校における「社会的な見方・考え方」の接続・発展に着目して—

小林 怜史*・川上 剛*・青柳 忠臣**・田仲 香里**
吉永 貴臣**・熊田 禎介***・溜池 善裕***・松村 啓子***
宇都宮大学共同教育学部附属小学校*
宇都宮大学共同教育学部附属中学校**
宇都宮大学共同教育学部***

本稿では、小・中学校社会科において「社会的な見方・考え方」を働かせた学習を位置づけた単元・授業として、「益子焼を生かした益子町のまちづくり」（小学校第4学年）および「日本の諸地域～北海道地方～」（中学校第2学年地理的分野）の実践事例について、単元・授業の実際と子どもたちの学びの姿について紹介、分析した。また、これまでの4年間における実践・研究を通して、各学年（分野）・単元・授業において「社会的な見方・考え方」の接続・発展や関連性を意識しながら適切に位置づけることで、子どもたちの多面的・多角的な学びや「深い学び」の実現に資する可能性があることが確認された。

キーワード：小・中学校社会科、「社会的な見方・考え方」、接続・発展、関連性

1. はじめに

本学部連携研究プロジェクト・社会科プロジェクトでは、2019年度から研究テーマを「社会を見つめ、社会と関わる力を育成する社会科授業」と設定し、実践・研究を行ってきた⁽¹⁾。周知のように、学習指導要領（平成29年告示）では、小・中学校社会科の目標は共通して「公民としての資質・能力の基

礎」で、また見方・考え方も「社会的な見方・考え方」でそれぞれ一貫性が図られている他、教育内容についても小・中学校の一貫性の枠組みが強く意識されている。なかでも、「社会的な見方・考え方」については、小学校の「社会的事象の見方・考え方」、また中学校の「社会的事象の地理的な見方・考え方」（地理的分野）・「社会的事象の歴史的な見方・考え方」（歴史的分野）・「現代社会の見方・考え方」（公民的分野）のように、校種・分野などの段階・特色をふまえた見方・考え方に整理されているが⁽²⁾、小学校から中学校、さらには高等学校までを見通して、子どもたちの「社会的な見方・考え方」をいかに接続・発展させながら、どのような資質・能力を育成していくのかについては、依然として重要な実践的課題となっていると考えられる⁽³⁾。

以上のような点から、これまで本プロジェクトでは、「社会を見つめ」ることを社会的事象について多面的・多角的に捉えること、また、「社会と関わる」ことを社会における課題を見つけ、議論し、解決しようとするものと位置づけ、子どもたちの発達段階や学びの連続性・関連性を念頭に置きながら、小・中学校の7年間における学びの姿と発展の道筋について明らかにしていく

[†] Satoshi KOBAYASHI*, Takeshi KAWAKAMI*, Tadaomi AOYAGI**, Kaori TANAKA**, Takaomi YOSHINAGA**, Teisuke KUMATA***, Yoshihiro TAMEIKE*** and Keiko MATSUMURA***: Development of Social Studies Lessons for nurturing skills on Social Understanding and Social Participation
Keywords: Social studies in elementary and junior high school, “Social viewpoints and ways of thinking”, Connection and development, Relevance

* Elementary School Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Junior High School Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

*** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

（連絡先：kumata@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

ことを目的としてきた。具体的には、小・中学校社会科において「社会的な見方・考え方」を働かせた学習を位置づけた単元・授業を構想・実践し、子どもたちの「社会的な見方・考え方」の発展の道筋とそれによる学びの成長について分析・検討を行なってきた。

本稿では、「社会的な見方・考え方」の接続・発展に着目しながら、小・中学校社会科において（複数の）異なる「社会的な見方・考え方」⁽⁴⁾を働かせた学習を位置づけた実践事例（小学校第4学年・中学校第2学年）について、単元・授業の実際と子どもたちの学びの姿について紹介、分析する。

2. 単元・授業の実際と子どもたちの学びの姿（小学校第4学年「益子焼を生かした益子町のまちづくり」）

（1）本単元における学習計画

本単元は、学習指導要領の内容「（5）県内の特色ある地域の様子」にあたる。本単元における学習計画を示すと、以下の【表1】の通りになる。

【表1】本単元における学習計画（総時数9時間）

	学習活動・内容（※数字は時数を示す）
(1)	家にある益子焼や益子町観光資源の資料を見て、学習問題「益子焼はどんな焼き物で、益子町は益子焼をどのように生かしているのだろう」を作り、予想を立てる。…2
(2)	益子焼の歴史や作り方について調べ、ワークシートにまとめる。【起 源 努 力】…1
(3)	益子町が益子焼を生かしている事例について調べる。【工 夫】…1
(4)	社会科見学の見学先で学んだことや立場を関係図にまとめ、共有する。【関 わり 継 承】…1
(5)	益子町の考えるまちづくりについて知り、益子焼を生かしたまちづくりとしての益子焼総販売額増加の取り組みについて考え、話合う。【工 夫 分 布 連 携 発 展】…3（本時3／3）
(6)	益子町まちづくりアイデアレポートに、取り組みのアイデアをまとめる。【連 携 発 展】…1

（※ゴシック字は「働かせたい見方・考え方」）

（2）本時の授業について

・ 題目

「益子焼のはん売がくを上げるためのアイデアを提案しよう」

・ 目標

益子焼を生かしたまちづくりとして、益子焼総販売額増加の取り組みについて話し合い、取り組みとその理由をワークシートに書くことができる。

【思考力・判断力・表現力等】

・ 指導方針

本単元を通して、益子焼に関わる様々な人々の協力を気付き、進んで益子焼総販売額増加の取り組みを考え、学習問題を追究し解決しようとする姿を「社会と関わる」姿として育成する。

単元の展開においては、益子焼の歴史や作り方とともに、益子町の自然環境やまちづくりに関わる人々の工夫や努力がよりよいまちづくりに繋がっていることを理解した上で、益子焼総販売額増加の取り組みのアイデアを学級全体やグループ、個人で考えるようにした。

また、社会科見学では、作り手の思いに触れられるように、見学先を3か所選定した。①伝統的な方法にこだわる窯元と、②日用品ではない陶壁をつくる窯元、そして③後継者を育成する県の施設のうち1か所を選んで見学をした後、手びねり体験をしたり、人間国宝である濱田庄司の作品を見たり、益子町役場の方の益子焼を生かしたまちづくりについて話を聞いたりした。

その上で、これまでに学習してきたことを生かして、販売額を上げるための取り組みを考えるという課題を設定した。全員が全く新しいアイデアを生み出すのは困難だと考えたため、益子町が現在行っているフォトコンテストなどの取り組みを継続するというアイデアも可とした。

本時（第8時）では、学習課題を追究するために、「社会的な見方・考え方」を働かせながら、多面的・多角的に考え、益子焼の販売額を上げるアイデアを表現できることをねらいとした。子どもたちの具体的な姿については、以下の評価計画における一例で示す。

・ 評価計画

- ア 観点－思考・判断・表現
- イ 方法－ワークシートの記述
- ウ 具体的評価基準等

おおむね満足 (○)	十分満足 (◎)	努力を要する子どもへの支援
観点を基に益子焼総販売額増加の取り組みのアイデアとその理由をワークシートに書いている。（思考・判断・表現）（ワークシート） 例 窯業技術支援センターと陶芸家が協力して新しい色合いの釉薬を開発することで、益子焼の人气が上がり販売額も上がる。	おおむね満足の様相に加え、複数の観点を基に組みのアイデアを書いている。 例 もう一度買ってくれる人が増えれば、販売額は上がるので、益子焼販売店同士で協力し、ポイントがたまったり、情報がもらえたりするアプリを作る。	考えをまとめられない子どもには、板書や資料と一緒に確認し、理由を明確にした取り組みについて考えることができるようにする。

・授業の流れ

前時（第7時）のうちに、「益子焼のはん売がくを上げるためのアイデアを考えよう」というめあてのもと、4人で構成されたグループごとにアイデアを考え、ホワイトボードに記入済みである。それらを黒板に掲示した上で、授業を開始した。

はじめに、社会科見学で町役場の方から与えられたミッションから「益子焼のはん売がくを上げるためのアイデアを提案しよう」というめあてを確認した。

その後、どんな観点で話すとよいか問いかけ、話し合う活動を設定し、売り上げ・取り組みやすさ・値段・お客さんなどの観点を見出した。それは、観点到に沿って互いの考えを見直すことができるようにするためである。

まずは、販売額を上げるためのアイデアについて、学級全体で話し合いの時間をもった。その際、誰が取り組みやすいのかと問い返すことで、取り組む立場を明確にし、多角的に考えられるように意識的に取り組んだ。また、観点到の良し悪しが分かるように、良ければ◎や悪ければ△などとホワイトボードに板書することで、アイデアを容易に比較できるような工夫をした。

そして、主に窯元の取り組みについて議論を交わしているところで、窯元が他県の窯元と協力して焼き物をつくる試みをしていることや、全国的にインターネット販売を行っているというインタビュー資料を提示した。また、インターネット販売を行う全国の販路図を提示することで、他者とのつながりや販路の広がりから取り組みのよさを考えることができるようにした。

その後、学級全体での話し合いを生かして、グループで話合った。その際に、納得した友達の意見を参考にしたり、反対意見の根拠にも耳を傾けたりして考えるように促した。それは、多様な考えを取り入れて、自分の考えを再構成できるようにするためである。また、他の観点到から考えてみるよう促すことで、複数の観点到から多面的に考えることができるようにした。そのようにして考えたアイデアを各自でワークシートに書いた。

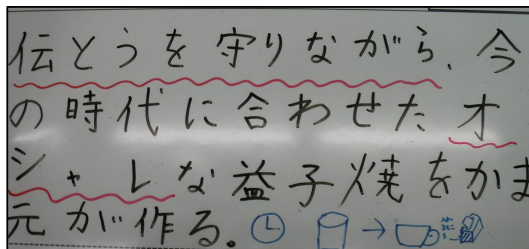
（3）授業の実際について

①前時（第7時）

各グループが作成した案は、【資料1】のような「窯

元が伝統を守りながら、今の時代に合わせたオシャレな益子焼をつくる」などの窯元の立場や、「町役場の人が中心となって、県外や外国に売る」などの販売の立場など、様々な立場からアイデアを出すことができていた。小学生らしい豊かな発想と学習した内容をふまえた非常に興味深いものであった。

【資料1】グループで作成したアイデアの一例



【資料1】のような考えが生まれたのは、益子焼が170年ほどの歴史をもつことを学び、社会科見学で実際に伝統製法への熱い思いを自分で見聞きし、なおかつ、益子焼を発展させるための新しい取り組みについて学習したからだと考えられる。

②本時（第8時）

本時において話し合いを進めていくなかで、【資料2】のようなアイデアが見られた。

【資料2】「社会を見つめ」ている姿の一例

益子焼のとうき市を、宇都宮や水戸、東京、横浜などで開き、webでも売る。

このように、陶器市を県外でも行うなど、販売する場所を工夫したり、全国に販路を拡大するために、webでの販売をしたりするなどのアイデアも多数見られた。販売額を上げるためには、人口がたくさんいる大都市で売ることが効果的だと考えたことに加え、益子から遠くない現実的な場所を選んでいるともいえる。また、webで販売することで益子から遠くの場所に住んでいる方にも買ってもらえるように陶器市とweb陶器市をセットで売るという比較的实现可能なアイデアを考えることもできた。他にも、人口が多い上に、周辺に有名な焼き物の産地がない「北海道」で、益子焼の陶器市を開催することで、手に取ってくれるのではないかと考える子どももいた。このように、「位置」や「分布」といった「社会的な見方・考え方」を働かせていた姿は、「社

会を見つめ」ている姿といえる。

そして、【資料3】のようなアイデアも生まれた。

【資料3】「社会を見つめ」ている姿の一例

益子焼を売っている所やインターネットで益子焼を買えば、わり引き券をもらえるようにする。わり引きけんは益子焼を使っているレストランや益子焼を買うときにつかうことができる。(発行は町役場)

これは、販売店と町が連携して割引券を発行することやその割引券は益子焼を使っているレストラン益子焼販売店で使えるという異なる立場が連携して行う取り組みである。これもまた、「連携」や「工夫」という「社会的な見方・考え方」を働かせ、「社会を見つめ」ている姿といえる。

以上のように、学級全体やグループでの話し合いを通して、子どもたちは多角的に捉えられるようになったと考えられる。

③単元末(第9時)

第9時においては、【資料4】のように、「益子町まちづくりアイデアレポート」(提案書)に窯元の取り組みだけでなく、町役場や外食チェーンが連携した取り組みについても言及することができている。

【資料4】連携について言及する提案書

町役場の方が、和食チェーン店とコラボし、お店で使っているお皿を益子焼にするイベントを行う。

(理由)

和食チェーン店などのお店とコラボすれば、全国のお客さんに益子焼を知ってもらえて、興味をもってもらえると思うから。

このように、いくつかの立場が連携して、販売額を上げる取り組みについて考えているのは、本時の資料を基に窯元同士の連携が効果的であるという考えをしっかりとつとめてきたからに他ならない。

そして、単元末の振り返りでは、【資料5】のように、益子焼が魅力的なものであり、益子焼の陶芸家になりたいと考える子どもも出てきた。

【資料5】「社会と関わる」姿の一例

益子焼は、自分が思っていたよりも作るのがむずかしく、みりよくな物だということがわかった。自分も、益子焼をたくさん使いたいと思った。今回の学習で、自分も益子焼を作るとうがい家になりたいと思った。

社会科学で益子焼に関わる人々の「思い」や「工夫」、「努力」に直接触れたことや益子焼でも人気がある窯元を題材にした資料から窯元の工夫や努力、益子焼に対する思いを読み取ったことが大きく影響したのではないかと考えている。「陶芸家になりたい」という姿は「社会と関わる」姿と捉えられる。

また、以前は益子焼にあまり興味がなかったものの、本単元の学習を通して、【資料6】のように、考えた子どももいた。

【資料6】「社会と関わる」姿の一例

益子焼について、ただの焼き物だと思っていましたが、学習してみて、工夫がほどこされ、町の人全員が努力をして成り立っている焼き物なんだなと考えました。このような努力を見て、益子焼がもっともっと続いてほしいと思いました。

ここでは、益子焼に関わる人々の「思い」や「工夫」、「努力」に触れて、「益子焼がこれからももっともっと長く続いてほしい」という思いに至っている。このような姿も「社会と関わる」姿といえよう。他にも、「益子焼をただの古めかしい焼き物だと考えていたことがばかばかしい」や「益子焼の学習をしたので、今度益子焼を買いに益子の陶器市に行ってみたい」、「web陶器市を母親と一緒に見て、実際に買ってみたい」、「もう一度自分の手で益子焼を作ってみたい」、「益子焼という素晴らしいものを知らない人にも広めたい」などという振り返りが見られた。全て「社会と関わる」姿といえるだろう。

(4) 実践を通して

本実践を通して、「位置」や「分布」に着目しながら益子焼を幅広く買ってもらおうとしたり、「連携」や「工夫」の視点から益子焼の認知度を上げようとしたりするなど、益子焼販売額増加に向けた取り組みのアイデアを提案・追究するなかで、「社

会的な見方・考え方」を働かせながら、「社会を見つめ」る姿を見取ることができた。

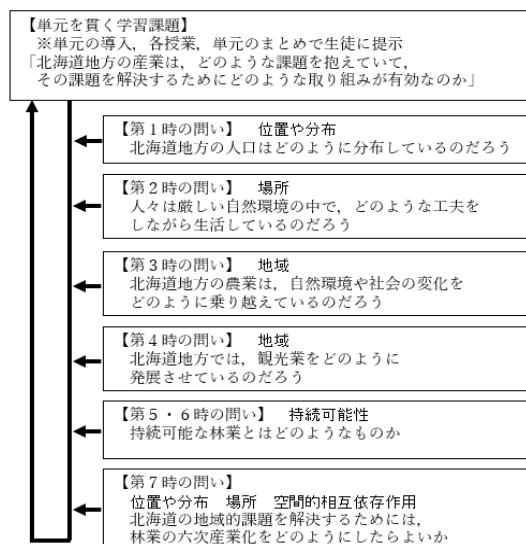
また、益子焼に関わる人々の益子焼を「続けたい」「広めたい」という「思い」や「工夫」、「努力」に触れることによって、「陶芸家になりたい」、「もっともっと続けてほしい」といった益子焼に関心を持ち続ける子どもたちの「社会と関わる」姿を見取ることができた。このように、人々の「思い」や「工夫」、「努力」に直接触れることは、「社会と関わる」上でとても重要であり、子どもたちの考え、ひいては今後の行動にまで関わる重大なことであるといえよう。よって、子どもたちが効果的かつ適切に「思い」や「工夫」、「努力」を感じ取ることができるように、教師は手だてを常に考えていかなければならない。その手だてについては、今後も検証を続けていく必要があると考える。

3. 単元・授業の実際と子どもたちの学びの姿（中学校第2学年地理的分野「日本の諸地域 北海道 地方」）

（1）本単元における学習計画

本単元は、学習指導要領の内容「（3）日本の諸地域」のア・イにあたる。本単元における学習計画を示すと、以下の【表2】の通りとなる。

【表2】本単元における学習計画



（※ゴシック字は、働かせたい見方・考え方）

（2）本時の授業について

・題目

「北海道の地域的課題を解決するためには、林業の六次産業化をどのようにしたらよいか」

・目標

北海道地方の地域的課題を解決させることにつながる林業の六次産業化の形について、他の産業との関わりを基に多面的・多角的に考察し、北海道の地域的特色をふまえた上で適切に表現できる。

【思考力・判断力・表現力等】

・指導方針

本単元で学習した北海道地方の地域的特色を基に、北海道地方の地域的課題を解決させるための方策として、前時に林業の六次産業化について班ごとに考察する。地域的課題は、「産業の付加価値率を高め、地域の発展に結びつける」という点を設定した。六次産業化については、持続可能性を追求するために SDGS の目標を1つ選択させ、その目標の達成を目指して考察させる。なお、本校では総合的な学習の時間で第1学年次からSDGSについて追究しているため、それぞれの目標における内容については十分に理解している。

前時までには、北海道地方の地域的特色について、産業を中核とした視点を基に追究させる。そのなかで、厳しい自然環境において生活する人々の工夫や生活の様子について、「位置や分布」、「場所」、「地域」などに着目させながら考察させる。その上で、第5・6時では、広大な森林面積に恵まれた林業を取り上げる。付加価値率に着目しながら課題を共有し、その課題を解決させるための六次産業化の案について、北海道地方の地域的特色を踏まえながら考察させる。

本時（第7時）では、学習課題を追究するために、「社会的な見方・考え方」を働かせながら、六次産業化した林業を多面的・多角的に考察し、持続可能性の具体的な姿の一例について表現できることをねらいとした。生徒が考える持続可能性の具体的な形については、以下の評価計画における「十分満足」の一例に示す。

・評価計画

ア 観点—思考・判断・表現

イ 方法—学習活動において提出された生徒の作品分析による

ウ 具体的評価基準等

「おおむね満足」	「十分満足」の一例	努力を要する生徒への支援
林業の六次産業化によって期待できる付加価値率の高まりについて記述している。	<p>「おおむね満足できる状況」に加えて、より効果的な林業の六次産業化について、空間的相互依存作用や北海道の地域的特色に着目して記述している。</p> <p>例) 持続可能な林業を実現するための六次産業化によって、他産業との連携による経済効果が付加価値率の高まりをもたらす。また、林業が営まれることによって自然環境の保全がもたらされ、森林機能の高まりによって漁業にも良い影響がもたらされる。</p>	前時に考察した六次産業化による良い影響を考えさせる。

・授業の流れ

はじめに、4人ごとに構成された9つの班を3つのグループに分け、各グループ内における他の班の六次産業化の案を評価する活動を行う。評価の規準は教師が示した資料を基に、「経済効果」と「環境保全」の観点で評価し合うことを共有する。2つの観点を2軸にしたマトリックス表の中心に自分の班の案を置き、自分の班と比較することで他の2つの案を表に位置づける。その際に、位置づけた理由や、修正点などのアドバイスを書き込み、同じグループ内で共有し合う。この活動は、1人1台配付されたタブレットを用い、Google ジャムボードの機能を使用することで、同じ班の生徒で同時に作業を行うことができる。

そして、他の班から受けた評価やアドバイスを基に班で再度修正をする時間を設け、その後に学級全体で学習課題について話し合う。話合いの形態は、ペアや班、学級全体を使い分けて行う。「どのような点を意識して班の案を修正したのか」を問いかけたり、教師が適宜資料を提示したりしながら話合いを進める。

なお、教師が本時で準備した資料は、「林業従事者へのインタビュー映像」（前編として、業務内容は前時に視聴済みである。後編として、他の産業との連携などについて触れた内容を本時で提示する）、「六次産業化の先行事例（他の産業との連携した事業も含む）」などである。

(3) 授業の実際について

前時に各班が作成した案は、北海道の地域的特色を生かしつつも、中学生らしい豊かな発想と丹念に調査した内容をふまえた非常に興味深いものであった。なかには、北海道の人口分布や、森林分布、さらに樹種の広がりに着目しながら考察した班もあっ

た。また、販売する場所を工夫したり、北海道の特産物を案に組み込んだりなどの工夫も見られた。下の【資料7】に示すように、「位置や分布」、「場所」といった「社会的な見方・考え方」を働かせている姿は、「社会を見つめ」ている姿と言える。

【資料7】「社会を見つめ」ている姿の一例

2 学習課題について、自分の意見を記入しよう。

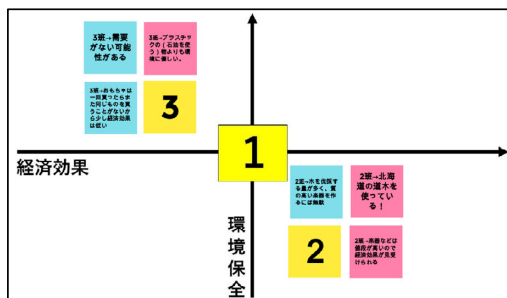
Q 付加価値をつけるには？ 〇他産業との連携

班で考えたことをメモしよう。

ある場所を考える
北海道ならむしろのみにし、北海道産だということアピールする。
他の企業と連携する

熱心に追究した分、本時における互いに評価し合う活動では、2軸の表に位置づける活動において、どの班も苦慮している様子であった。前時にその案については理解しており、初見ではない。しかし、評価基準を調整する必要がある、それぞれがしっかりとした意見を持ち寄っているため良い意味で議論がぶつかり、授業者の想定より時間をかけている姿があった。以下の【資料8】のように、位置づけだけではなく、修正点やアドバイスもしっかりと議論し加えていた。

【資料8】生徒による位置づけや修正点・アドバイス



また、【資料9】のように、この活動のなかでは、「間伐材を使用しているのは、無駄に木を伐採するのではないから環境にも良く、利用することで経済効果も見込める」という思考から2軸の表に位置づけている意見が多かった。

水をたくさん使っていて無駄が少ない

水を使ったメニューとして有名なになったら喜ぶ人が増えそう！

4

北海道にしか合わない木材の使い方なのか（なぜ北海道に合うのか）

たとえばどんな木を使うか

6

間伐材が無駄になりにくい

高価な木でなければいけない理由

グランピングなどの施設は楽くない

何か珍しいものも通販したらネットで安くしやすいくなる

コース料理だけでなくの販売なのか、それとも単品やセットでの販売は考えていないのか。

環境

次に、他の班に評価されたシート（アドバイスを
含む）を見て、多くの生徒がその意見に対し反論や
説明をしたい様子であった。本時において、そのや
り取りをする時間を確保できなかった点は反省点の
一つである。後述する「他産業との連携」なども、
そのやり取りによって話題として上がるなど、さま
ざまな生徒の姿を見取ることができたはずであろ
う。

なお、前時までの活動で授業者は各班の案を把握している。間伐材を使用した遊具や教具、廃材を利用した燃料設備、木製品をプラスチックの代用にするなど、主に工業や商業との連携が多かった。そのなかに、唯一、1つの班だけが「漁業」との連携を基に六次産業化を考察していたことを付け加えておく。

的な見方・考え方」を働かせていた姿を見取ることができた。

その上で、再度、学習課題について個人で考えさせ、記述させたところ、【資料10】に示すように、「他の産業との結びつきを強め、互いに活性化することが、持続可能な林業につながる」という意見があり全体で共有した。単元の学習の前では漠然とした「持続可能性」という見方・考え方が、一例ではあるものの、より具体的な形として構造化されたといえる。そして、このような姿が、「社会と関わる」姿といえよう。

学習課題について、自分の意見を記入しよう。

作業の種にとらわれず、他の産業との親密な連携
つ 産業全体が活上り → 持続可能な社会の実現

班で考えたことをメモしよう。

生活に密着した製品に利用する (経済効果)

→ 需要が高い、持続性アリ

不材が何と多量
ボタニカルを主な
製品とソ

本実践を通して、林業の六次産業化を追究する過程において、北海道地方の地域的特色を基にした案を考察していることから、「位置や分布」、「場所」などの「社会的な見方・考え方」を働かせながら「社会を見つめ」る姿を見取ることができた。

また、そのような学習を踏まえた上で、「空間的相互依存作用」などの「社会的な見方・考え方」を働かせることによって、持続可能な林業の形を、他の産業との連携とそれに伴う相乗効果への期待を表現していることから、「社会と関わる」姿を見取ることができた。

– 117 –

4. おわりに

本稿では、本プロジェクトの研究テーマ「社会を見つめ、社会と関わる力を育成する社会科授業」に向けて、小・中学校社会科において(複数の)異なる「社会的な見方・考え方」を働かせた学習を位置づけた単元・授業として、「益子焼を生かした益子町のまちづくり」(小学校第4学年)および「日本の諸地域～北海道地方～」(中学校第2学年)の実践事例について、単元・授業の実際と子どもたちの学びの姿について紹介、分析した。

今回取り上げた実践は、本研究の最終年度(4年目)において構想・実践した小学校第4学年と中学校第2学年(地理的分野)の事例ではあるが、本プロジェクトでは、これまでの4年間を通じて小・中学校社会科の各学年・単元における「社会的な見方・考え方」を働かせた学習を位置づけた単元・授業を構想・実践し、そのなかでの子どもたちの学びの姿の一端を見取ってきた。

その結果、各学年(分野)・単元・授業において「社会的な見方・考え方」の接続・発展や関連性に意識しながら適切に位置づけることで、子どもたちの多面的・多角的な学びや「深い学び」の実現に資する可能性があることが確認された。一方で、小学校については、今回の実践では最終的に提案書を書くという教師の立てた学習計画に即して単元の学習を展開したが、子どもたちが具体的な事実を調べることを通して、自身が社会とどのように関わっていくことができるかを考え、自ら実践していく「社会と関わる」姿を実現するために行う支援の不十分さが課題である。また、中学校については、具体的事実はまだ下りつつ「社会を見つめ」ているのか(【資料7】)、「社会と関わる」ことをしようとしているのか(【資料10】)は、確認することが難しい見取りの方法であった。小・中学校社会科の各学年(分野)・単元における「社会的な見方・考え方」の接続・発展の在り方や関連性ととともに、「社会的な見方・考え方」を働かせることで子どもたちにどのような資質・能力を育成していくことができるのか、また育成されることで伸びて行く子どもたちの事実を捉える方法をどうするかについては、残された重要な課題である⁽⁵⁾。

【註】

(1) 本プロジェクトにおける実践・研究の概要に

については、宇都宮大学教育学部・附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』(2019年6月)、宇都宮大学共同教育学部・附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』(2020年6月)、同『連携研究プロジェクト 研究概要集』(2021年6月)、同『連携研究プロジェクト 研究概要集』(2022年6月)を参照されたい。

- (2) 『『社会的な見方・考え方』を働かせたイメージの例』(中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申)」, 別添資料3-5)。「社会的な見方・考え方」については、澤井陽介・加藤寿郎編著『見方・考え方[社会科編]「見方・考え方を働かせる真の授業の姿とは?」』(東洋館出版社, 2017年)に詳しい。
- (3) 日本社会科教育学会第68回全国研究大会における課題研究Ⅲでは、「社会的な見方・考え方との構造と発展」(『日本社会科教育学会全国大会発表論文集 第14号』2018年)、同じく第69回全国研究大会における課題研究Ⅰでは、「社会的な見方・考え方を育む小中高一貫の社会科授業の在り方を探る」(『同 15号』, 2019年)のテーマのもと、「社会的な見方・考え方」の構造や発展性・一貫性に関する提案・議論がなされている。
- (4) なお、ここでいう「異なる『社会的な見方・考え方』」とは、前註(2)「別添資料3-5」中において、小学校社会、中学校社会(地理的分野)、中学校社会(歴史的分野)、中学校社会(公民的分野)ごとに「考えられる視点例」として例示されている各視点のことを指している。
- (5) 各校種・分野などにおける「社会的な見方・考え方」と育成の在り方については、江口勇治監修・編著、井田仁康・唐木清志・國分麻里・村井大介編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』(帝国書院, 2018年)などに詳しい。

附記 本プロジェクトにおけるメンバー・所属は、2022年3月時点のものである。

令和4年4月1日 受理

Development of Social Studies Lessons for nurturing skills on Social Understanding and Social Participation

Satoshi KOBAYASHI, Takeshi KAWAKAMI, Tadaomi AOYAGI,
Kaori TANAKA, Takaomi YOSHINAGA, Teisuke KUMATA,
Yoshihiro TAMEIKE and Keiko MATSUMURA